

フンボルトペンギンの羽毛による眼疾患の一症例

福島千鶴・稲村 修（魚津水族館）

はじめに

魚津水族館では、三代目水族館オープン時（1981年4月）よりフンボルトペンギン *Spheniscus humboldti* を飼育している。

飼育施設は屋外にあり、プールとステージを合わせた展示部分の面積は 49.62 m²、プールの水量は 13.5 t である。また、施設内には面積 10.44 m² の繁殖室がある。巣穴は繁殖室内部に 12 個、ステージに 2 個設置してある。飼育水は、夏期に井戸水、その他の時期は海水を使用しており、密閉式急速濾過機で濾過されている。

2010年4月1日現在の飼育個体数は 22 羽（雌 13 羽、雄 9 羽）で、各個体は通し番号をつけて腕輪による個体識別をしている。

2009年の夏に、個体番号No.17（図1）の左眼に羽毛が入り込んだことによる眼疾患が生じた。当館で初めての症例であったので、その概要を報告

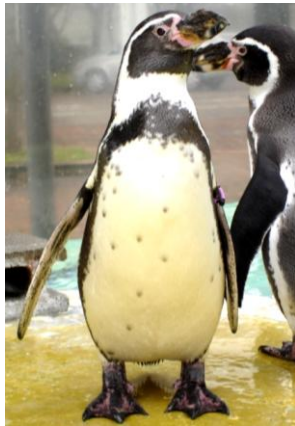


図 1

国内血統登録番号：635

個体番号：17

マイクロチップ番号：392148000052470

1989年4月9日生まれ、雌

体重：約 4.25 kg

症例および経過

2009年7月31日：左眼をずっと閉じているのを確認した。強制的に左眼の瞼を開けて観察すると、白い膜がよじれたようになっており、正常な眼球を確認できなかった（図2）。



図 2

8月3日：閉じた左眼に白濁した液体が盛り上がり溜まっていた。

8月5日：左眼は通常通り、もしくは細く開けている状態で、白濁した膜状のものは変わらず観察されたので獣医師に連絡し、診察を依頼した。

7月31日から8月5日の間、摂餌にはムラがあり、餌を投げて与えても左眼が見えていないのか上手くキャッチできないことが多かった。

8月6日：獣医師と共に観察したところ、よじれた白い膜状のものが羽根であると判明した。長さ約 2.5 cm の羽根（図3）が眼を横断する方向でコンタクトレンズのように眼球を覆っていたので鉗子で摘み、取り出した。羽根を取り出した後、眼を開けることはできるがかなり充血しており涙も出ていた。瞬膜を動かすことは確認した。



図3

8月8日時点で左眼角膜が白濁しており、結膜の充血も認められた（図4）ため、同日より抗生物質入り点眼液（ニューキノロン系抗菌点眼剤）を点眼した。

症例個体へのストレスを考慮して隔離は行わず、通常の飼育作業中に捕獲できた際に点眼を行った。8月15日には眼球の白濁が消失し充血も認められなかったので（図5）、完治したと判断し加療を中止、経過を観察した。



図4

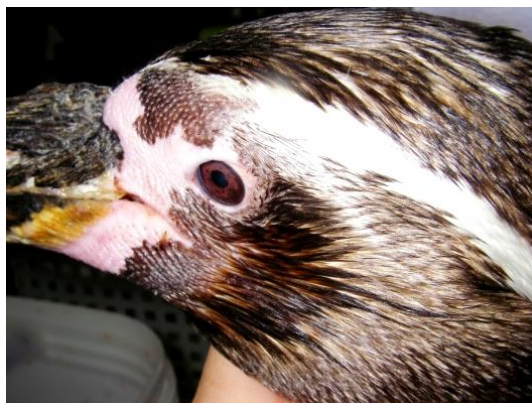


図5

点眼は計7日間、一日2回行った。点眼期間中、初日以外は全て摂餌が確認でき、特に期間中の後半では通常通り給餌者へ寄りつき餌を欲しがると見られ、投餌もキャッチして摂餌していた。

その後、左眼の状態や個体の行動に異常は見られず、同年の繁殖期には産卵・抱卵の繁殖行動も行った。

考察

今回の症例が発症した時期は、当館のフンボルトペンギンの換羽期にあたり、羽繕いなどで抜けた羽根が何らかのきっかけで眼に入りこんでしまったものと推測される。

しかし、羽繕いなどの自然な行動での入り込みを避けることは非常に難しい。今後こういった事故が起こり得る可能性が十分にあることから、換羽期は一日4回の清掃を通常以上に念入りに行い、ステージや小屋内に落ちている羽根を洗い流すと共に、飼育の基本である「個体の観察」を充実するように心がけていきたい。

謝辞

今回の疾病にあたり、治療及び指導をいただき、さらに本報告の校閲をしていただいた魚津市農林水産課家畜診療所の谷口一人獣医師に、深謝します。